

司祭養成コース

私が、ザンクト・アウグスティンの哲学・神学大学で勉強し始めた頃は、カトリック教会の司祭養成コースが変わり始めた時期であった。かつて、神学の勉強は、哲学の後に位置づけられていた。というのも、人間とは何かを、理性に頼り



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 15

ながら考察する哲学は、神と人間とを結びつける信仰を考察する神学の必須な準備と見なされていたからである。この伝統的な棲み分け、つまり、修練期の後の

のものはあまり変わらなかつた気がするが、全体的に量が多い、多くの分野を含む勉強になっていた。私が入会した神言会の養成コースには、司祭職の資

食わず嫌いから必要性認識



神言会の修道服

格に必要な哲学、聖書学、教会の教えの歴史と構造を取り上げる組織神学、倫理神学、教会史、教会法等のほかに、自然科学概論、そして人類学も必修科目となっているという特色があった。ギムナジウムの時から文学と語学に興味を持っていた私は、はじめはこれらの

科目にあまり関心を持たなかつたが、かじってみたらかなりタメになる内容であった。南山大学の入学式で、本学がカトリック大学であることを意識せずに参加した新入生が、予告なしに始まるお祈りに驚かされる経験に似ているかもしれない。いづれにしても、(例えばガリレオの地動説に対する教会の見解に代表される)自然科学と宗教(教理)の対立は勝ち負けの問題ではなく、科学技術と環境問題や、原発の必要性をめぐる議論にも見られるように、多くの学問分野に跨がる、学際的な対話が必要なのである。特別展で公開予定である。

(無論、ガリレオの時は教会の負けであったが)。

南山大学が設立当初から人類学民族学研究所を設置し、1952年に人類学科を立ち上げたのは、設立母体である神言会から見れば当然な計画であった。日本中で発掘調査を行っていた神言会会員の人類学者の研究結果の多くは南山大学の人類学博物館に納められている。博物館はただ今リニューアルのため閉鎖中であるが、收藏品の一部は、来年の2月から名古屋市博物館で開催される南山大学、明治大学、名古屋市共催の